

Paradise Lost の一考察

—Eve の夢と予表論—

A Study of *Paradise Lost*

—Eve's Dreams and Typology—

山 口 和 世

序

Milton の *Paradise Lost* は *Genesis* 第三章に記されている人類墮落物語を素材としている。ところが、彼は素材には現われない「夢」を *Paradise Lost* のなかで加筆している。Adam は三回 (Ⅷ. 287-309, 452-477, Ⅺ. 423 f.), Eve は二回 (Ⅳ. 799-809 および Ⅴ. 30-93, Ⅺ. 595-597 および 610-614) 各々夢を見る。本稿はこのうち Eve が見る二つの夢に⁽¹⁾焦点を絞る、*Paradise Lost* 執筆にあたって「夢」を独創した Milton の目的と、その結果生じる効果を探ろうとするものである。

I 英国十七世紀文学と夢

Milton が創作活動を行なった英国十七世紀において、夢は人々にどのように考えられていたであろうか。英国十七世紀は、伝統的夢概念と新しい夢の解釈が相剋していた時代であると言えよう。Tyron や Felltham は Plato 以来の超自然的、神秘的夢概念を継承し、推進させている。⁽²⁾一方の陣営の雄、Hobbes はその著、*Leviathan*⁽⁴⁾において、夢は単なる機械的活動にすぎないとして、完全に自然主義的な観点から把握すべきことを主張する。Hobbes 以前にも夢に対して懐疑的な立場をとる人々は数多く現われている。Hobbes に近いところでは、英国唯物論の祖、Francis Bacon がその一人である。しかし、彼らは聖書のなかの超自然的、神秘的な夢の存在を例外的に許容している。Hobbes に至って初めて聖書の夢も超自然的、神秘的な仮面を剥がれるのである。伝統的な夢概念と科学的な夢解釈の対立のなかで、やがて後者が優位を占めていく。

十七世紀は異常病理への関心が高まった時代でもある。⁽⁵⁾Burton や Bright が 'melanchory' に関する著作を著わし、James 朝劇は陰惨で倒錯した主題と人物を扱っている。こうした知的環境が、科学的思想の前進にもかかわらず、一方において、超自然的、神秘的夢概念を依然として温存させる力になったと考えられる。

夢をとりまく以上のような趨勢のなかで、十七世紀の文学者がとった態後は、伝統的な夢概念にそのまま依拠し、夢を重要な表現手段の一つとすることであったと思われる。

Jonson, Donne は Sappho に始まる love dream lyric⁽⁶⁾ の分野においていくつかの優れた作品を残し, Bunyan の *Pilgrim's Progress* は中世に流行した dream vision に倣っているところが多い。

Milton も夢に対して並み並みならぬ興味を示している。創作順に追うと, “Elegy III” では天国の vision が現われる。“On the Fifth of November” は Christian epic において伝統的な, 地獄の Satan によって引き起こされる煽動のための夢, *Comus* は “clear dream and solemn vision” (457), “L’Allegro” は, 夏の夕べ小川の辺で若い詩人達が見るような夢, “Il Penseroso” は “some strange mysterious dream” (146) を含む。*Paradise Lost* の後で書かれた *Paradise Regained* において, Satan は Christ を征服するために夢を手段とする。

Paradise Lost 執筆にあたって Milton は叙事詩の伝統を強く意識しており, Homer, Virgil, Tasso, Spenser といった叙事詩の大先達に勝るとも劣らぬ作品の完成を目差している。“The Reason of Church Government” は彼が叙事詩の形式や主題について模索した様を示している。⁽⁷⁾そして, *Paradise Lost* の巻頭では, “Things unattempted yet in prose or rhyme” (I. 16) を歌うために “Heav’nly Muse” (I. 6) に助けを求める。また, 自分が選んだ主題を次のように自負する。

Sad task, yet argument

Not less but more heroic than the wrath
Of stern Achilles on his foe pursued
Thrice fugitive about Troy wall; or rage
Of Turnus for Lavinia disespoused;
Or Neptune’s ire or Juno’s, that so long
Perplexed the Greek and Cytherea’s son; (IX. 13-19)

Homer から Spenser に至る大叙事詩の作家は, いずれもその作品のなかで超自然的, 神秘的な夢を用いている。したがって, 彼らを凌駕しようとした Milton が, 同じように超自然的, 神秘的な夢を創り, 叙事詩における有効な構成要素にしたであろうと推測することは難くない。

更に, Milton が度々作品の素材とした聖書は, 古代の夢理論の例に漏れず, 超自然的, 神秘的な夢を重視する記述を数多く含んでいる。Milton は, 聖書の物語は神によって授けられたものであると信じる熱心な清教徒であり, 聖書に現われる夢と同じような役割を, 自らの創意になる夢に与えたと考えられるであろう。

しかし, *Paradise Lost* のなかで Eve が見る夢は, 十七世紀当時の夢をめぐる文学的傾向, 叙事詩における夢の伝統, 聖書の夢という三つの要素によっては, 十分に説明されたこと

にならないと思われる。Milton が生きた時代を特徴づける別の思想的、精神的風土のなかで Eve の夢を捉えなおすことが必要であろう。十七世紀の人々の行動と意識を強く支配した予表論的思考と夢の関係を考えることが、Eve の夢の特質をより明確にするであろう。

Ⅱ 予表論と夢

予表論 (typology) とは厳密には Christian typology を指す。即ち、旧約聖書の人物、事物、出来事は新約聖書で成就されるべきそれらの予表 (type) であると解釈するものである。ところが、予表論はすべての人間にとって本質的、かつ普遍的な思考形態であるとする見解⁽¹⁰⁾があつて、そこから非宗教的な事柄についても予表論を拡大適用する傾向が生じてくる。

英国十七世紀は、この傾向をまさに熱狂的に示す時代である。当時の人々は自らの行動原理とその倫理的基盤を予表論に置いていたと言ってもよいだろう。聖書の物語が現実の個人、および社会生活のなかで再現されると考えたのである。十七世紀英国史の大事件である新大陸への移民や清教徒革命も予表論的文脈のなかに位置づけることが可能である。Pilgrim Fathers の一行は新大陸へ移住するに際して、Abraham⁽¹¹⁾ の旅立ちの物語を支えとしたのである。それより約二十年後に起こった清教徒革命の指導者、Cromwell の行動を貫徹していたのは自らを Moses⁽¹²⁾ であるとする信念⁽¹³⁾であり、彼の軍隊は「大いなる強き將軍主 Jesus Christ の軍旗のもと」、神の摂理に導かれて国王軍を破ったと確信された。そして、清教徒たちは清教徒革命こそ、第五王国 (千年王国) の予言⁽¹⁴⁾を実現させるものとして歓迎したのである。

予表論をこのように本来の目的以外に用いる態度が当時の詩人にとっても関心事となつたのは当然のことである。Donne は民衆を相手とする説教はもちろんのこと、幾つかの詩において予表論を用いている。彼の他に、Herbert, Vaughan, Traherne も同様に予表論的表現をその詩のなかに取り入れている⁽¹⁵⁾。

Donne のような宗教的遍歴の持ち主でさえ、当時の人々、特に清教徒たちが魅了されていた予表論的思考を意識的に利用したのであれば、清教徒詩人である Milton の場合は言うまでもなからう。彼は Cromwell 政権における外国語文書担当官という重職に就いている。強烈な予表論的思考に基づいて自己の使命を認識する Cromwell を統率者とし、同じ思考傾向を抱く人々によって支えられた政権、これが Milton がその中枢に位置を占めた政権の特徴である。したがって、公人としての生活においても、文筆を執る場合にも、Milton が予表論的思考形態に拠るところが大きかったということは頷けよう。彼は Cromwell 政権樹立に先立つ内戦⁽¹⁶⁾を Israel 民の砂漠での漂泊に喩えている。彼が *Paradise Lost* の創作を始めた頃には、反動勢力は王政復古の巻き返しを計り、清教徒政権は脆くも崩壊する。既に完全失明によって肉体的、精神的苦悩を味わっていた Milton を襲った衝撃は想像を絶するものであったろう。*Samson Agonistes* については、その主人公を Milton の政治的分身とする解釈を始めとして、当時の政治情勢と関連させて読もうとする批評がある⁽¹⁷⁾。その是非はともかくとして、

理想と逆行する時勢のなかに置かれた Milton の政治信念の吐露を *Samson Agonistes* に読みとることを可能ならしめている事実には注目せざるを得ない。*Samson Agonistes* は、*Paradise Lost* 同様、聖書に素材を求めており、*Judges*, 第十四章—第十六章に基づく。Charles 一世の処刑によって、待望の「Christ の国」が成就されたと感じた清教徒たちは、王政復古に直面するに及んで、屈辱的な奴隷状態から立ち直り敵国の人々を倒す Samson という旧約聖書の人物へ立ち返ることによって、緊迫状態にある英国社会の前途を希望的に解釈しようと努めたであろうと思われる。

更に、広義の予表論を文学的手法とする伝統は、既に Virgil によって確立されている。*Aeneid* のなかの多くの場面や出来事は、Augustus Caesar が支配した Virgil 当時の Rome 史の予表となっており、Aeneas は Augustus Caesar の予表的人物であると考えられたのである。⁽¹⁸⁾ その伝説的な祖先は Aeneas に遡ると信じられていた Augustus Caesar は、自らの威力を示し、かつ、その政治的理想に対し崇高な表現を与えることを、Virgil に期待したのである。また、Virgil を精神、文学両面にわたる師と仰ぐ Dante は、古代神話の人物である Theseus を自身の予表として扱っている。⁽¹⁹⁾ 叙事詩の形式を決定するにあたって思案を重ね、結局、Virgil 風の叙事詩、即ち、secondary epic⁽²⁰⁾ を選択した Milton が、Virgil に始まる予表論的表現方法を見逃すはずはなかったであろう。

十七世紀英国において清教徒を含む新教徒詩人は、神のために詩作すること、神聖な主題を扱い神を讃美すること、この二つを自己の使命であると考えている。しかし、同時に、自己の能力の限界という問題に直面しなければならなくなった時、同じような立場にあった聖書に登場する詩人に自分を関係づけることによって、この問題に取り組もうとする。たとえば、Moses を叙事詩人、David を抒情詩人の予表であるとし、自らを Moses や David に準える。⁽²¹⁾ Milton は、

Sing, Heav'nly Muse, that on the secret top
Of Oreb, or of Sinai, didst inspire
That shepherd who first taught the chosen seed
In the beginning how the heav'ns and earth
Rose out of Chaos; (I. 6-10)

と歌って、自分を new Moses であると考えた。

Milton の予表論的表現は、Abraham (*Paradise Lost* XII, 152), Moses (XII, 237), Joshua (XII, 310), David (XIII, 326) を Christ の予表 (“type”, “figure”, “shadow”) とする極めて正統的予表論から、Virgil や Dante に倣って、古代神話の人物を予表論的に用いるという拡大通用にまで亙っている。“On the Morning of Christ's Nativity” では、Pan と幼い Hercules は幼子 Christ の予表となっている。⁽²²⁾ この場合、異教的な神話人物と Christ

が予表論的角度から捉えられていることが重要である。作品構成要素を極力予表論の枠組に組み入れようとする Milton の姿勢を見ることができる。

先に触れたように、予表論とは旧約聖書の予言、特に Messiah 出現の予言が Jesus Christ によって現実化されたとする信仰から始まる。旧約聖書に見られる予言を X とし、その実際の成就を Y とするならば、Y は X の繰り返しとなり、X と Y は対応関係にあると考えられる。さて、予言としての夢概念は、種々の夢概念のうちで最も原始的な性質のものであり、かつ、最も根強い力を持っている。古代 Greece では職業的な夢解釈者が存在し、夢のなかで神託を得ようとする習慣がある。⁽²⁴⁾ また、Homer の作品や聖書には、数多くの予言的夢がその具体的成就とともに記述されている。⁽²⁵⁾ わが国上代においては、夢は神意の表現であり、起こるべき事態の予兆であると考えられている。いわゆる正夢と呼ばれる夢と現実の間には、X と Y の関係が成立する。したがって、予表論と予言としての夢は、予言という同一機能を帯びることによって容易に結びつく事象である。先述の第五王国思想は Daniel が見た予言的夢と John に示された予言的 vision に由来する。Daniel が夢に見た四つの獣は、Assyria, Persia, Greece, Rome と続いた歴史上の四つの帝国を意味し、四つの獣が滅びた後に始まる聖徒たる民の永遠の国こそ、第五の王国、「Christ の国」であるとする解釈に基づく。Daniel を始め、*the Apocalypse* などの黙示文学は予言文学と類似した点が多い。そこで、夢は予表論という system の一要素として位置づけられる。世俗的な人物、事物、出来事を好んで予表論的に解釈した十七世紀の人々が、夢をも予表論的思考の枠内に入れこんだと考えられることは可能であろう。私たちは、先に、Milton がその作品のなかに夢を頻繁に用いた要因として、いくつかの背景を見たのであるが、予表論をその一つとして加えることが必要であると思われる。

Ⅲ Eve の第一の夢

Eve が最初に見る夢は従来注目を浴びている。主な見解を列挙すると次のようになる。

- 一 Eve は夢のなかでは依然罪に陥ってはいないが、Eve の夢は誘惑に対する脆さを彼女が内在させていることを暗示するものである。⁽²⁶⁾
 - 二 夢のなかでの誘惑場面は、Eve が既に罪の状態にいることを示す。⁽²⁷⁾
 - 三 夢は Eve が罪の第一段階にあることを示し、誘惑とそれによる墮落は夢に見られる Eve の心理状態の結果である。⁽²⁸⁾
 - 四 Satan にとって夢は誘惑の戦略を決定するための重要な手段となっている。⁽²⁹⁾
 - 五 Eve の夢は二度にわたる誘惑という聖書解釈上の伝統に則したものであるが、Milton は誘惑場面の繰り返しを避けるために、夢を基本主題の一変型として用いている。⁽³⁰⁾
- 以上に示されるように、研究の議論の多くは誘惑が二度 (Eve の夢のなか——Ⅳ, 799—809 と、Ⅴ 30—93, 現実——Ⅵ. 513 f.) 繰り返されることの意味に集中している感がある。

誘惑は Milton が絶えず追求した問題である。初期の仮面劇、*Comus* は純潔な乙女に対す

る Comus の誘惑を扱ったものであり、*Paradise Regained* は *Matthew, Gospel* 第四章、*Luke, Gospel* 第四章で述べられている三つの誘惑に加えて、饗宴の場と嵐の場を挿入することによって、Satan による誘惑とそれに対決する Jesus Christ を描いている。*Samson Agonistes* も傲慢の故に誘惑の罠にかかり、悲惨な境遇に落ちた Samson を主人公として描いている。

更に、Milton の前には誘惑としての夢の長い伝統がある。Eve の夢を創造するに際して、Milton は、Agamemnon⁽³¹⁾ から Turnus⁽³²⁾、Red Cross Knight⁽³³⁾ に至る誘惑の夢を念頭に置いていたであろう。既に、Milton は“On the Fifth of November”のなかで、僧侶の格好をした Satan が教皇の枕辺に立ち、反乱の企てを唆す夢を描いている。また、*Paradise Regained* では、Satan は Christ を誘惑するために饗宴の夢を用いる⁽³⁴⁾。

しかし、これらの誘惑の夢と Eve の見る夢にはいくつかの差異が認められる。Homer, Virgil, Spenser の叙事詩に描かれている誘惑の夢は現実化されることはない。むしろ、夢の内容とその後に起こる現実とは全く正反対である。それらの夢は夢見る人の行動の動機づけとしての側面が強い。“On the Fifth of November”における教皇の夢も同じく行動の直接的動機となっていて、夢を見た後、彼は直ぐ反乱を計画する。*Paradise Regained* で Christ が夢見る饗宴もそれに対応する現実場面は欠けている。夢を見た翌朝、Christ はとある森に赴くが、そこで Satan が用意した豪華な饗宴を毅然として拒否する。*Paradise Lost* に大きな影響を及ぼしたと考えられる叙事詩人の手になる誘惑の夢、また、Milton 自身の他の作品に現われる誘惑の夢、双方ともに予示的機能を含んではいない。一方、Eve の夢は、*Paradise Regained* において Satan が、

lend them [men] oft my aid,
Oft my advice by presages and signs,
And answers, oracles, portents and dreams,
Whereby they may direct their future life. (I. 393-396)

と宣言するような夢であり、“presages”, “signs”, “oracles”, “portents”と同族関係にある。Eve の夢が予言的なものであることは、Eve の夢の内容を聞いた Adam の解釈が結果的に誤っていたという事実によって証明される。Adam によれば、Eve の夢は昨夜二人が交した会話の所為である。これは丁度、*Canterbury Tales* のうちの“The Nun’s Priest’s Tale”において、Chanticleer と Partlet の間で繰り返される夢解釈に似ている。そこでは、Chanticleer が見る予示的、警告的な夢について Partlet が中世生理学に基づいて意見を述べる。しかし、Partlet の見解は翌日 Chanticleer を襲った事件によって覆される。Eve の夢はこれから起こる出来事を予示する序曲になっていると言えよう。しかも言葉による単なる暗示ではなく、禁断の木の実を口にするという具体的行為が夢の内容となることに

よって、後の Eve の墮罪行為と細部に至るまで対応している。Eve の夢は *Paradise Lost* の著しい特徴である対応的構造の一部を構成する⁽³⁵⁾。

天使の姿を装った Satan は Eve に虚栄心と傲慢の気持を煽る。まず彼は Eve を “angelic” (V. 73), あるいは “goddess” (V. 78) と称して追従する。次に、知恵の木の実によって人間が神の地位にまで達することは、神の怒りをかうものではなく、むしろ神への讃美となるという詭弁を駆使する。Eve は Satan の論法に破れ、木の実を食べる。その結果、Satan とともに空を飛ぶ⁽³⁶⁾。これは Nebuchadnezzär が見る天に達するほどの美しい木の夢⁽³⁷⁾と同じく、神に対する不遜の比喩的表現である。その後、案内役の天使の姿をした Satan が突然消え、Eve は落下する。Nebuchadnezzär を示す木は切り倒され、Satan もまた神に対する反逆の罪として地獄へ落とされたのである。

Eve が夢で見たことはそのまま誘惑場面において逐次対応的に繰り返される。人類墮落前の蛇の壮麗な姿を借りた Satan は、Eve に “sovrän mistress” (IX. 532), “Empress of this fair world” (IX. 567), “Queen of this universe” (IX. 684) と呼びかけ、巧言令色を用いる。Satan は誘惑の第一段階としての甘言から偽善へと移る。人間と同じように話す能力を蛇に与える知恵の木の実は、人間を神の地位に高めることができようと言はる。この日の朝以来、Adam に対して不当な自己主張を繰り返し傲慢な態度に出て、“what is faith, love, virtue, unassayed / Alone, without exterior help sustained?” (IX. 335-336) と断言した Eve は、今や人間の限界と神の命令を忘れ、遂に Satan の奸刑に陥ってしまう。木の実を食べた Eve は、自分は Adam よりも優れ、神にも等しい知恵を持っていると誇る。また、禁断の木の実を讃える一方、禁断の木の実を食べてはならないとの命令を下した神を “Our great Forbidder” (IX. 815) であると感じ始める。かくして、Eve が見た予言的な誘惑の夢は、現実の誘惑によって成就されることになる。現実反映的な性質を持つ Adam の最初の夢でさえ、夢の直後に Adam が目にすることへの “shadow” (VIII. 311) であると Milton は表現する。予言的な色彩を持つ Eve の夢は、夢と対応し、その繰り返しとなる現実に対して、type, あるいは、shadow の役割を果していると考えすることは難くないであろう。

IV. Eve の第二の夢

Eve のもう一つの夢は最初の夢にも増して予表論的な性格が強く、厳密な意味での予表論に近くなる。神の命令、

If patiently thy bidding they obey,
Dismiss them not disconsolate; reveal
To Adam what shall come in future days,

As I shall thee enlighten; intermix
 My cov'nant in the woman's seed renewed;
 So send them forth, though sorrowing, yet in peace;
 (XI. 112-117)

を受けて、天使 Michael は Adam に対し人類史を vision の形で示す。それを後に残されて眠る Eve が夢のなかで見る。したがって、Eve の第二の夢を語るためには、Adam の第三の夢 (vision) について解釈しなければならない。Adam が Michael に高い山上へ導かれて vision を示される場面は、*Paradise Regained* のところで触れた、Satan による第二の Adam, Christ 誘惑の件⁽³⁸⁾、および、Eve が夢のなかで Satan の案内によって空を飛行する図と対比関係をなすことは明らかである。また、この場面における Adam の半睡半醒の状態は旧約聖書の予言者たち、たとえば *Daniel*, 第十章, 第八節における Daniel が夢 (vision) を見た時に示す経験に喩えられよう。したがって、Adam が見る予言的 vision は、新約聖書で成就されるはずの旧約聖書における予言と同じ類のもの、即ち、antitype を必然的に予想する type として構想されていると思われる。

Adam に示される vision は Cain の Abel 殺しから大洪水に至るまで、即ち、紀元前四千年から紀元前二千年に亘る最初の人類史である。まず墮罪の結果生じた死が示される。一つは Cain による Abel 殺害という暴力による死である。続いて、癩病による悲惨な死の場面が現われる。この死を Michael は “ungoverned appetite, ... a brutish vice, / Inductive mainly to the sin of Eve.” (XI. 517-519) と説明する。第三の vision として主を忘れた Cain と Seth の子孫の生活が現われる。第四に戦争、第五に頹廢的な時代とその時起こる大洪水の vision が展開する。第一から第三の vision までは全く悪である。しかし、第四の vision には義なる人 Enoch が現われる。第五の vision には、Adam の子孫の墮落、および、その罪の結果としての世界喪失 (大洪水) が続くが、それと同時に Noah が登場する。Adam と Eve に起因する罪の歴史が Christ の type である Noah の出現によって終るのである。そして大洪水の後には、第六の vision として新しい世界、 “Betok'ning peace from God, and cov'nant new” (XI. 867) を象徴する虹が見られる。第一から第六の vision に至る変化は、悪から善、換言すれば、墮落から救済への pattern として把握されよう。Adam は示された vision に対して、

Far less I now lament for one whole world
 Of wicked sons destroyed than I rejoice
 For one man found so perfect and so just,
 That God vouchsafes to raise another world
 From him, and all his anger to forget. (XI. 874-878)

という反応を示す。

十一巻において墮罪から救済へという救済史的 vision の形で示された人類史の pattern は、最終巻において一層鮮明になる。Michael は今度は大洪水から Christ 再臨までの模様を語る。先に示された最初的人类史では、墮罪の結果生じた悪と罪の vision が長く続いたのに対し、十二巻では救済に比重が置かれている。始めに Michael は、Nimrod と彼が建てる天にも届かんばかりの Babel の塔について語る。Nimrod の罪は Adam, Eve の原罪と同じく、理性が他の諸機能を支配できない時に生じるものであると説明される。しかし、悪と罪の例は Nimrod の行為をもって終り、墮落した人類に約束されたあの女人の⁽³⁹⁾ “seed” (Jesus Christ) への言及 (XII. 148-150, 228, 233, 379) が頻繁に現われるようになる。それに伴って、Christ の type である人物 (Moses, Abraham, Joshua, David) のことが語られる。人類の歴史は、これら旧約聖書のなかの “shadowy types” から “truth” (Christ) への歴史 (XII. 303) であることが明確にされる。最初の二千年に亘る人類史から二千年後に起こる Christ 降誕を教えられる時、Adam は歓喜極まって次のように述べる。

O prophet of glad tidings, finisher
Of utmost hope ! now clear I understand
What oft my steadiest thoughts have searched in vain,
Why our great Expectation should be called
The Seed of Woman: Virgin Mother, hail,
High in the love of Heav'n, yet from my loins
Thou shalt proceed, and from thy womb the Son
Of God Most High; so God with man unites. (XII. 375-382)

大洪水の後、虹の vision を見た時に Adam が示す反応が、ここでは増巾された形となっている。Noah による人類の部分的救済は Christ によって完全な救済に昇華されるのである。最後に、Christ の再臨によってもたらされる

far happier place
Than this of Eden, and far happier days. (XII. 464-465)

が語られ、Adam の喜びは最高潮に達する。

O goodness infinite, goodness immense !
That all this good of evil shall produce,
And evil turn to good; more wonderful
Than that which by creation first brought forth

Light out of darkness ! Full of doubt I stand,
 Whether I should repent me now of sin
 By me done and occasioned, or rejoice
 Much more, that much more good thereof shall spring,
 (XII. 469-476)

ここに、Lovejoy の指摘⁽⁴⁰⁾以来、*felix culpa* という伝統的 paradox が成立すると考えられている。Michael によって Adam に示された予言的 vision と物語の pattern は、*Paradise Lost* の主題、

man's first disobedience, and the fruit
 Of that forbidden tree, whose mortal taste
 Brought death into the world, and all our woe,
 With loss of Eden, till one greater Man
 Restore us, and regain the blissful seat, (I. 1-5)

に要約される。Milton の歴史観は円環的、退化論的⁽⁴¹⁾いずれでもない。むしろ、神の摂理の歴史支配を信じるという聖書的、救済史的⁽⁴²⁾歴史意識である。

Adam が Michael によって示される vision と物語は、そのまま Eve の最後の夢の内容となっている。

Her also I [Michael] with gentle dreams have calmed,
 Portending good, and all her spirits composed
 To meek submission:

 Whence thou return'st, and whither went'st, I [Eve] know;
 For God is also in sleep, and dreams advise,
 Which he hath sent propitious, some great good
 Presaging, since with sorrow and heart's distress
 Wearied I fell asleep. (XII. 595-614)

神は悲しみにくれる Eve の魂に、“gentle dream”によって“good / Presaging”を与えたのである。したがって、Eve の夢は現実⁽⁴³⁾に Adam が経験していることを反映した夢でありながら、Adam が見る vision と同様、予言的な性格を同時に併せ持っていると言えよう。

予言的、救済史的 vision と物語は Adam と Eve に大きな精神的变化をもたらす。各 vision と物語は Adam と Eve の信仰の段階を示すように構成されているとも考えられる。Christ の再臨に至る人類史を示された Adam は単なる受動的な観察者、傾聴者に終るので

はなく、彼の子孫の経験を自らのものとして生きる。即ち、子孫が味わうことになる悩みと一体化し、自ら“shadowy types”を経て、Satan と Satan の一族である罪や死に対し精神的勝利をおさめることによって、第二の Adam たる Christ⁽⁴³⁾ になる。言わば、彼は Michael によって示された vision と物語を完全に内面化するのである。Eve もまた Adam に教えられ、前に、約束されたあの女人の“seed”を既に知っており、

This future consolation yet secure
I carry hence; though all by me is lost,
Such favor I unworthy am vouchsafed,
By me the Promised Seed shall all restore. (XII. 620-623)

という希望を得る。Eve の最初の夢が彼女を Adam から離す引き金になったのに対し、同一内容を持つ二人の最後の夢 (vision) は、二人の結合を強固にする役割を持つ。⁽⁴⁴⁾ 更に Adam と Eve は墮落以前と異なって、今や非常に人間的で、読者に近い存在となっている。

Michael によって vision を示される Adam, Adam の経験を夢の中に見る Eve, そして Adam と Eve に対する読者、この三者の位置は恰も劇中劇の場面における俳優と観客の位置に酷似している。即ち、各々は、劇中劇を演じる俳優、舞台の上で劇中劇の観客の役割を演じる俳優、その両者を見る観客に相当する。*Paradise Lost*, 第十一巻, 十二巻は、あるいは、Elizabeth 朝や James 朝時代の劇作家が度々用いた劇中劇の手法よりも更に複雑であるとも思われる。それは Spain の画家、Velázquez による『侍女たち』の構図と比較されるかも知れない。Velázquez が国王 Felipe 四世と王妃の像を描いているところへ、王女がお供を連れて入って来る。ところが、この絵を一瞥した鑑賞者からすれば、Velázquez が描いているのは王女を中心とする一行であると思われる。結果的には、Velázquez の対象は国王夫妻と王女一行の双方になる。⁽⁴⁵⁾ しかし、画面のなかの Velázquez の目は鑑賞者自身を凝視しており、鑑賞者は自分が Velázquez の対象である国王夫妻の位置に立っていることに気がつく。その国王夫婦の姿は画面の奥の鏡に映っている。したがって、鑑賞者自身も絵の空間のなかへ引き入れられることになる。一對の相互反写鏡を用いたような劇中劇も Velázquez の手法も、俳優 (絵のなかの人物たち) と観客 (鑑賞者) を一体化させる効果を持っている。⁽⁴⁶⁾ *Paradise Lost* の読者は、十一巻と十二巻における Adam, Eve と同一の体験を経るよう仕向けられているのである。読者自身が *Paradise Lost* の主題であり、⁽⁴⁷⁾ 読者は“direct involvement”⁽⁴⁸⁾ を要求される。このような読者の位置は、十一巻と十二巻で示される人類の未来史に対応する現実が *Paradise Lost* に省略されている事実、即ち、Adam と Eve が楽園を出て歴史に踏み出すところで終わっている巻末との関係において考慮しなければならない。

文学の伝統という観点から見ると、*Paradise Lost*, 十一巻と十二巻は、Aeneas が亡父 Anchises から Rome の将来、特に Augustus と Marcellus について予言される *Aeneid*

第六巻に倣ったものと思われる。*Aeneid*, 第六巻は Aeneas の冥府旅行であるが, Anchises は予言的 vision を示した後, Aeneas と巫女 Sibyl を象牙の夢の門から地上へ送り出すのであるから, 夢を枠とした物語の一つと考えるとよいだろう。続く第七巻から十二巻に展開される Aeneas と Turnus の戦い, および, Aeneas の勝利は, 既に六巻で予想決定されているのであり, 新たな発展ではない。第六巻で示された予言的 vision の現実面における具体化の第一歩が第七巻—第十二巻であると言えよう。*Aeneid* 第六巻と同様の手法は *The Faerie Queene* 第三巻にも見られる。そこでは, Britomart と Arthegall の血筋をひくことになる子孫が魔法使い Merlin によって語られる。“a fragment of a series of dreams”⁽⁴⁹⁾ といった観を呈している *The Faerie Queene* も *Aeneid* と同じく未完に終わっているものの, 第四巻第六篇と第五巻第七篇において Merlin の予言の具体化への萌芽が見られる。Spenser は Raleigh への手紙のなかで, Homer, Ariosto, Tasso と並んで Virgil を手本にしたと述べている。そして, 先に触れたように, Milton まもた Spenser を含むこれらの詩人を念頭に置きながら *Paradise Lost* の主題と様式を検討したのである。結局, 彼は Virgil, Spenser 流の叙事詩様式に拠っているのであり, vision, あるいは語りの形式で Adam に示される未来の人類史を描くに際しては, *Aeneid* 第六巻と第七巻—第十二巻に見られる予言的 vision とその具体的展開という関係, *The Faerie Queene* 第三巻, 第三篇が全巻に占める位置について注意を払ったであろうと考えられる。

しかし, Milton は未来の人類史を展開させるという方法はとらず, 未来に約束されている救済の予言で, 全巻を終了させている。Michael は Adam と Eve を楽園の外へと導く。火剣は, 二人の後に揮われ, 天使たちが楽園を守護するために陣取っている。最終行において, Adam と Eve は次のように描かれる。

The world was all before them, where to choose
 Their place of rest, and Providence their guide:
 They hand in hand, with wand'ring steps and slow,
 Through Eden took their solitary way. (XII. 646-649)

二人は自分たちが犯した罪の故に人類の悲惨な歴史が始まることを悟りながらも, 人類史の未来には救済があることを確信しつつ, 楽園を後にする。“*Paradise Lost* is the epic of exile; of greatness in ruins; of restoration possible and promised in the end”⁽⁵¹⁾ という評は的を得ている。

ここで, 再び私たちは, Abraham (最初の pilgrim であり, Christ の type) の旅立ちの物語を拠所とし, 神の摂理に身を委ねた Pilgrim Fathers, そして, 彼らと同じく, 救済史的世界観を固持し, 予表論に自己の行動の基盤を置いた英国本土の清教徒, その一人としての

Milton 像を思い出す。彼らにとって世界史は途中に完成のない無限の流れであり、人間は、「Christ の国」に向って進む Pilgrim として把握されたのである。したがって、清教徒たちは、神の摂理を導きとして樂園から歴史の世界へと旅立つ Adam と Eve の姿に強く共鳴したに違いない。また、Adam と Eve に示された夢 (vision) や物語の予言は、現実の歴史の上で成就され、「Christ の国」の到来の日に最終的実現を見ることを彼らは確信したであろう。Milton は、彼の生きた時代に深く浸透していた救済史的世界観と 予表論的意識に立脚して Adam と Eve の最後の夢 (vision) を創り、かつ、読者が二人の夢を自らのものとして生きるように読者操作を試みていると考えられる。

結 び

私たちは、Eve の二つの夢 (最後の夢は Adam に示される 予言的 vision を含む) は、十七世紀英国に流布した予表論と極めて密接な関係を持っていることを見てきた。当時の Christ 教作家は Christ 教信仰の真理を表現するために、多くの方法で予表論を用いている。⁽⁵²⁾ その代表的な作家である Milton は、予言的な機能を持つ夢をも予表論の system に組み入れたと考えられる。

人類の墮落を予言する Eve の第一の夢と、人類の救済を予言する Eve の第二の夢 (Adam 第三の vision) は平衡関係にあり、墮落から救済へという *Paradise Lost* の基本的 pattern の決定的な部分で用いられている。Milton は、Eve 第一の夢に対応し、それが成就される場面、即ち、Eve の墮落場面を詳細に描くことによって、第二の夢の現実化、即ち、人類の救済に対する強い確信を表明したものと思われる。予表論は *Paradise Lost* における theme, motif, structural pattern に大きく寄与していると言ってよいだろう。

注 釈

- (1) Eve の第二の夢は Adam が最後に見る vision と重なりあう。
- (2) Plato, 更には Orpheus 教, Pythagoras 主義に遡る 伝統的夢概念については、拙稿「トポス：夢のなかの旅——その起源と十七世紀に至る系譜——」『院生論集』第七号, 3-4。
- (3) Manfred Weidhorn. *Dreams in Seventeenth-Century English Literature* (Paris, 1970), p. 156.
- (4) ed. Michael Oakeshot (Oxford, 1953) pp. 9-10, 12-13, 195-196.
- (5) Manfred Weidhorn, p. 157.
- (6) Mario Praz, "Donne's Relation to the Poetry of His Time," *A Garland for John Donne*, ed. Theodore Spencer (Cambridge, 1958), p. 53.
- (7) C. S. Lewis, *Preface to "Paradise Lost"* (Oxford U. P., 1975), pp. 3-8.
- (8) *Genesis*, 20.3, 28.12, 31.11, 31.24, 37.5-11, 40.5-9, 41.1-24.
Judges, 7.13-15.
Job, 3.15 f.
Daniel, 1.17, 2.1-11, 2.27 f., 4.1-27.

- (9) A. E. Dyson and Julian Lovelock, "Event Perverse: The Epic of exile," *Milton: "Paradise Lost": A Casebook*, ed. A. E. Dyson and Julian Lovelock (London and Basingstoke, 1973), p. 238.
- (10) Robert Hollander, "Typology and Secular Literature: Some Medieval Problems and Examples," *Literary Uses of Typology from the Late Middle Ages to the Present*, ed. Earl Miner (Princeton U. P., 1977), p. 4.
- (11) 「時に主はアブラムに言われた、『あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。(中略)』アブラムは主が言われたようにいで立った」(*Genesis* 12.1-4)
「信仰によって、アブラムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った」(*Hebrews, Epistle* 11.8)
- (12) 川崎寿彦, 『マーヴェルの庭』(研究社, 1974), p. 292.
大木英夫, 『ピューリタン, 近代化の精神構造』(中央公論社, 1976), p. 84.
上記二書によれば, *Hebrews, Epistle* は清教徒が聖書のうちで最も好んだ書である。
- (13) 川崎寿彦, p. 282.
- (14) *Daniel*, 7. *the Apocalypse*, 20.4.
第五王国思想と清教徒革命の関係については, 大木英夫, pp. 47, 141-167 が詳しい。
- (15) Barbara Kiefer Lewalski, "Typological Symbolism and the 'Progress of the Soul' in Seventeenth-Century Literature" *Literary Uses of Typology from the Late Middle Ages to the Present*, ed. Earl Miner, pp. 83, 89-99.
- (16) *Eikonoklastes*, III. 580.
但し, Milton は千年王国思想に対しては懐疑的だったようである。(*Paradise Lost*, ed. Alastair Fowler [London, 1971], p. 631. fn.)
- (17) G. W. Knight, *Chariot of Wrath* (London, 1942), p. 101.
- (18) Robert Hollander, p. 6.
- (19) *ibid.*, p. 11. *Inferno*, IX.
- (20) C. S. Lewis, p. 40.
- (21) Barbara Kiefer Lewalski, p. 107.
- (22) *ibid.*, p. 103.
- (23) *Iliad*. I. i. 63.
- (24) E. R. Dodds, *The Greeks and the Irrational* (Boston, 1957), p. 110.
- (25) fn. 8.
- (26) Fowler, p. 259. fn.
H. V. S. Ogden, "The Crisis of *Paradise Lost* Reconsidered," *PQ*, XXXVI (1957), 2-13.
- (27) Millicent Bell, "The Fallacy of the Fall in *Paradise Lost*," *PMLA* LXIII (1953), 867, 871-875.
- (28) A. J. A. Waldock, "*Paradise Lost*" and *Its Critics* (Cambridge, 1961), p. 33.
- (29) Manfred Weidhorn, p. 151 fn.
- (30) *ibid.*, pp. 140, 151 fn.
Calvin らの説によると, 成功しなかった最初の誘惑は人類創造の日に行なわれた。
- (31) *Iliad*, II.
- (32) *Aeneid*, VII.
- (33) *The Faerie Queene*, I.
- (34) この夢は Christ の飢えから生じた夢であることも確かである。

- (35) B. Rajan, "*Paradise Lost*" and the Seventeenth-Century Reader (U. of Mich. P., 1967), pp. 49-50.
 例 天国の会議と地獄の会議。
 天地創造と Pandemonium 構築。
- (36) 夢のなかの旅というトポスと Eve の第一の夢との関係については, 前掲拙稿, 23-25.
- (37) *Daniel*, 4.
- (38) *Matthew, Gospel*, 4. 8. *Luke, Gospel*, 4. 5.
- (39) Eve が創造されるのを見る Adam の夢 (VIII. 452-478) と, Maria (第二の Eve) に至る人類史の vision, 物語は, 予表論的対応関係をなしているという指摘(Fowler. p. 581 fn.)がある。
- (40) "Milton and the Paradox of the Fortunate Fall," *ELH*, IV (1937), 161-179.
- (41) Marjorie Hope Nicolson, *John Milton: A Reader's Guide to His Poetry* (New York, 1975), p. 321.
- (42) 大木英夫, pp. 48, 185.
- (43) Barbara Kiefer Lewalski, pp. 103-104.
- (44) もっとも, この場面における知識の与えられ方については, Adam と Eve の間に hierarchy が認められることは確かである。
- (45) この絵は当初『国王一家の肖像』と呼ばれた。
- (46) cf. M. C. Bradbrook, *Shakespeare and Elizabethan Poetry* (London, 1951), p. 157.
 Ralph Berry, *Shakespeare's Comedies: Exploration in Form* (Princeton U. P., 1973), p. 101.
- (47) Stanley Fish, "The Harassed Reader in *Paradise Lost*," *Milton: "Paradise Lost": A Casebook*, p. 152.
- (48) A. E. Dyson and Julian Lovelock, p. 222.
- (49) 前掲拙稿, 8-9.
- (50) A. J. J. Ratcliff, *A History of Dreams: A Brief Account of the Evolution of Dream Theories, with a Chapter on the Dream in Literature* (London, 1923), p. 235.
- (51) A. E. Dyson and Julian Lovelock, p. 240.
- (52) *Literary Uses of Typology*, Preface ix.